

はしがき

■編集の趣旨

巷間をにぎわした、改訂「学習指導要領」による新教科書で学ぶ高校生・受験生用として、期待される**発展**。学習に応えるべく、小社では新しい『**発展30日完成シリーズ**』を企画し、順次刊行してまいります。

編集にあたっては、小社版薄物シリーズの長所はすべて採り入れ、良問の精選と、詳しくて誰にもわかる解答を心がけました。

本書は、このシリーズの一冊として、日本文学史の基本的な重要事項について、**自分の手で整理しながら理解すること**を目指して作成しました。高校二年生後半から三年生を主な対象としましたが、柔軟に使用することが可能です。

■本書の特長

- 1 書名にあるとおり、三十日間、毎日一つの小テーマについて練習を積み重ねると、**日本文学史の基本的な重要知識が一通り学習**できるように工夫してあります。しかも、あえて**網羅的にせず、受験に必要な知識に**しぼったところが本書の特色です。
- 2 時代区分は、上代・中古(二つは一括扱い)・中世・近世・近代(二分制)とし、各時代の最初に展開図を置いて時代の全体像を把握できるようにしました。
- 3 各時代はさらに、主としてジャンルを中心にいくつかの章に分

け、作品・作者とその解説から成る表覧形式で**重要項目が一目で分かる**ようにしました。

その際、**古典関係は作品中心に、近代関係は作家中心に**まとめ、解説文中の重要ポイントは**太字**で示しています。

- 4 五日分ある展開図には、重要な作品・作家を空欄(最大三十)にしてありますから、下段の選択肢をもとに記入しましょう。

またそれ以外の日では、作品または作家の欄に原則として五箇所ずつ空欄を設けました。これは**最重要事項**と考えてください。

- 5 「別冊解答書」には、「解答」のほかに、**近年の入試問題**の中から代表的なものを選び抜き、整理して掲載しました。知識の確認と力試しに利用してください。

- 6 この「サブノート」が完成したら、**学習の際座右に置いて**、一つの作品を学習することとその**関連項目を参照**するようにしましょう。その都度まとまった知識が増えていくはずですよ。

本書によって、国語学習の背景となる文学史の知識が確実に身に付くことを期待しています。

編著者

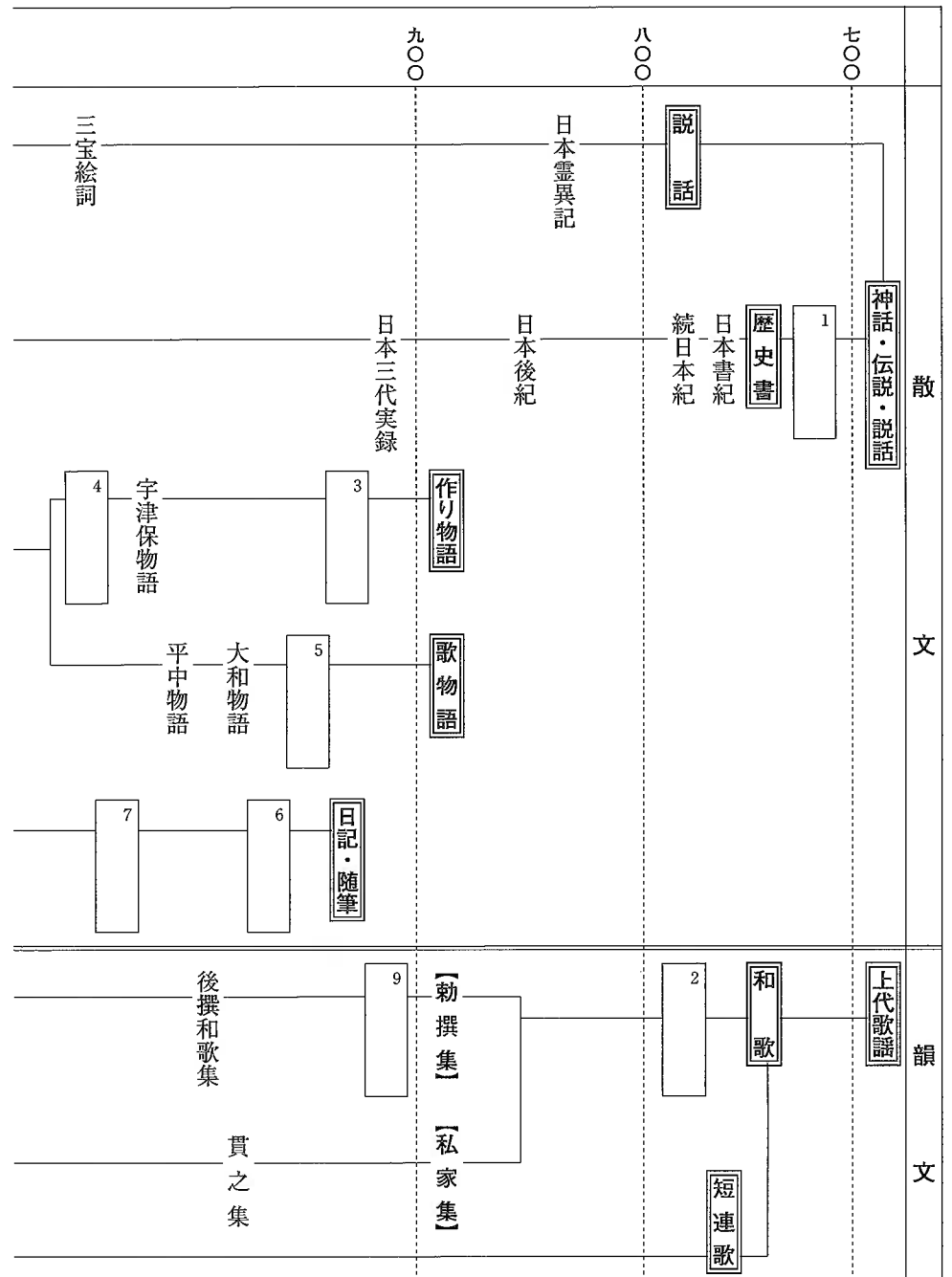
《目次》

第1日	上代・中古文学の展開	4	第16日	近世の劇文学・随筆	34
第2日	上代の文学	6	第17日	近代文学の展開 (1) (明治・大正)	36
第3日	中古の詩歌	8	第18日	明治の文学 (1)	38
第4日	中古の物語	10	第19日	明治の文学 (2)	40
第5日	中古の歴史物語・説話	12	第20日	鷗外と漱石	42
第6日	中古の日記・随筆	14	第21日	明治から大正へ	44
第7日	中世文学の展開	16	第22日	大正の文学	46
第8日	中世の詩歌	18	第23日	近代文学の展開 (2) (昭和)	48
第9日	中世の歴史物語・軍記物語	20	第24日	大正から昭和へ	50
第10日	中世の説話・評論	22	第25日	昭和の文学 (1)	52
第11日	中世の随筆・日記	24	第26日	昭和の文学 (2)	54
第12日	近世文学の展開	26	第27日	近代の詩	56
第13日	近世の小説 (1)	28	第28日	近代の短歌・俳句	58
第14日	近世の小説 (2)	30	第29日	主要作品冒頭文 (古典編)	60
第15日	近世の詩歌	32	第30日	主要作品冒頭文 (近代編)	62

上代・中古文学の展開

20分

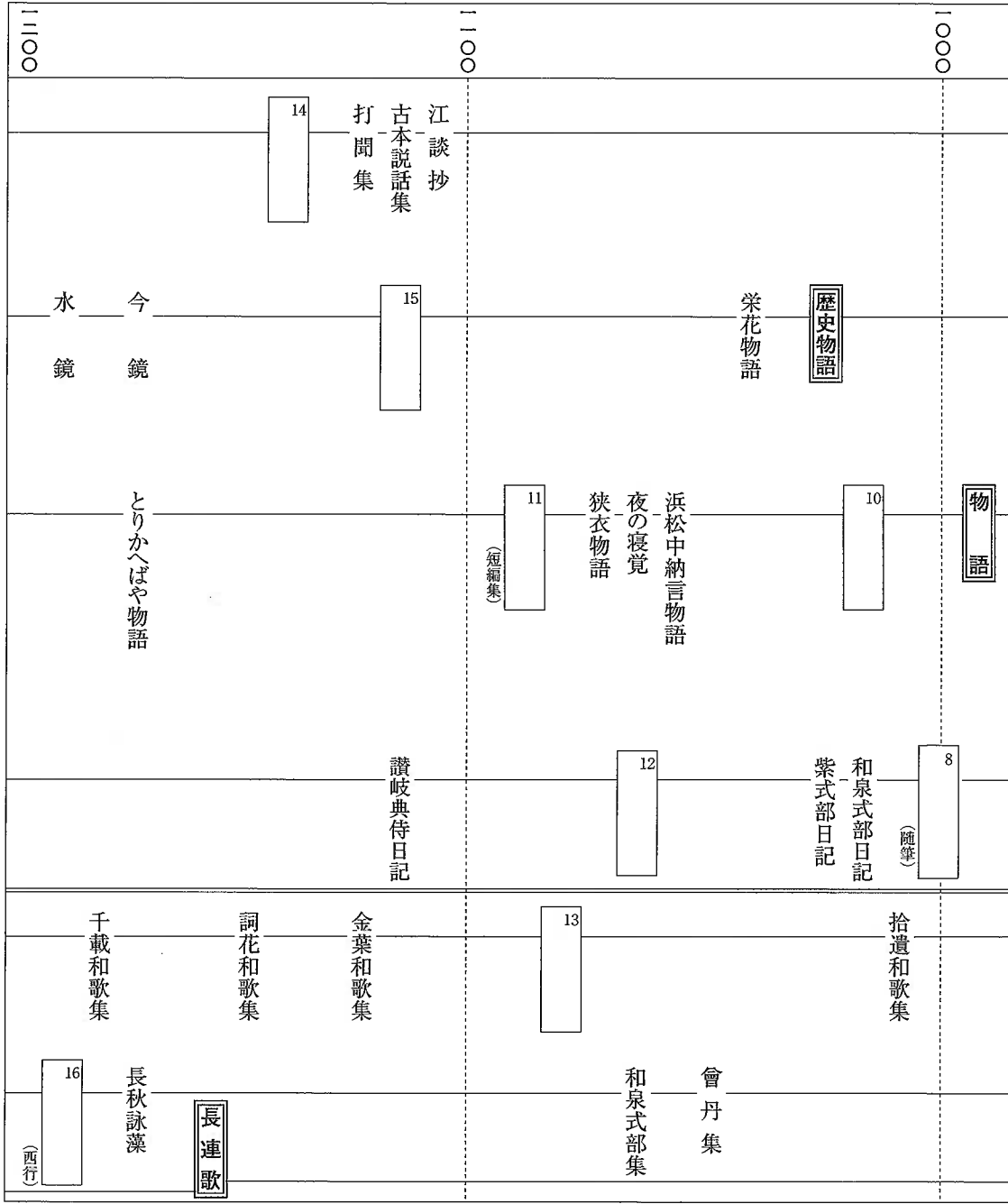
月 日 曜日



◆上代・中古
上代Ⅱ文学の発生から平安京遷都(七九四)まで。
中古Ⅱ平安京遷都(七九四)から鎌倉幕府の成立(一一九二)まで。

問題

上の表の空欄1～16に、次の作品から適切なものを選んで記入しなさい。
*伊勢物語
*大鏡
*落窪物語
*蜻蛉日記
*源氏物語
*古今和歌集
*古事記
*後拾遺和歌集
*今昔物語集
*更級日記
*山家集
*竹取物語
*堤中納言物語
*土佐日記



*枕草子
*万葉集

1 史書・地誌

作品	作(編)者	ここがポイント
1	稗田阿礼 誦習 太安万侶 撰録	種田阿礼が誦み習っていた帝紀(皇室に関する諸記録)や本辞(皇室・諸氏族に伝わる神話・伝説など)を、元明天皇の命で太安万侶が撰び記録した。日本最古の叙事文学で、上代の歌謡が多教採録されている。 〔構成〕上巻Ⅱ天地創造から神武天皇に至るまでの神話。 中・下巻Ⅱ神武天皇から推古天皇に至るまでの伝説・歴史など。 〔成立〕和銅五年(七二二)。
2	舍人親王 編	元正天皇の命で舍人親王が中心となり編集した。『古事記』に比して史実に重点を置き、異伝を記すなど歴史的要素が強い。六国史の最初の作で、純粹の漢文で書かれている。 〔構成〕巻一・巻二Ⅱ神代紀で、天地創造から神武天皇までの神話。 巻二Ⅱ巻三十Ⅱ神武天皇から持統天皇までの編年体の記録。 〔成立〕養老四年(七二〇)。
風土記	編者未詳	和銅六年(七二三)、諸国に対し、産物、地名の由来、神話・伝説などを記して奉れとの勅命が下された。それに応じて、諸国から撰進された記録。五十数カ国から奉られたが、完全な形で残るのは、「出雲国風土記」(鳥根)だけで、他に「常陸」(茨城)・「播磨」(兵庫)・「豊後」(大分)・「肥前」(佐賀)・長崎)の一部が残っている。

◆六国史

- ① 『日本書紀』(七二〇)
- ② 『続日本紀』(七九七)
- ③ 『日本後紀』(八四〇)
- ④ 『続日本後紀』(八六九)
- ⑤ 『日本文徳天皇実録』(八七九)
- ⑥ 『日本三代実録』(九〇二)

◆祝詞・宣命

祝詞Ⅱ神に奏する祈願・祝福の言葉。
宣命Ⅱ天皇が臣下に告げる言葉。

2 和歌・漢詩

作品	作(編)者	ここがポイント
3	大伴家持 (最終的な編者)	全二〇巻。総歌数約四五〇〇首。その内、短歌が約四二〇〇首、長歌が約二六〇首、旋頭歌が約六〇首。基本的には、①雑歌、②相聞、③挽歌の三大部立。現存するわが国最古の歌集。東歌、防人歌も含まれる。 〔時代区分〕第一期(発生期)Ⅱ壬申の乱(六七二)まで。集団的歌謡から個性的な和歌が誕生。代表歌人は、額田王、舒明天皇、有間皇子。第二期(確立期)Ⅱ平城京遷都(七一〇)まで。表現形式が整備され、長歌が完成する。代表歌人は、柿本人麻呂、高市黒人。第三期(最盛期)Ⅱ天平五年(七三三)まで。個性的な歌人が輩出する。代表歌人は、山上憶良、山部赤人、大伴旅人、高橋虫麻呂。第四期(衰退期)Ⅱ天平宝字三年(七五九)まで。歌が類型化する一方、感傷的歌風に変わる。代表歌人は、大伴家持、笠女郎。 〔成立〕天平宝字三年(七五九)以降で、七八〇年前後か。 大友皇子、阿倍仲麻呂ら上流知識人六四人の漢詩約二二〇編を収録した、現存するわが国最古の漢詩集。〔成立〕天平勝宝三年(七五一)。
懐風藻	撰者未詳	

◆雑歌

『万葉集』の公的な歌。
相聞・挽歌を除き、行幸・旅・宴遊などの歌を含む。一五五〇首ほど。

◆相聞

主として恋愛の歌。一七〇〇首あまり。

◆挽歌

人の死に関する歌。二〇〇首あまり。

◆東歌

東国地方の民衆の生活を歌った民謡的な歌。巻十四に約二四〇首。

◆防人歌

東国地方から九州沿岸防備に派遣された兵士やその家族の歌。巻十四に五首、巻二十に約九〇首。

◆上代歌謡の歌体

- ① 片歌Ⅱ五七七の歌。これが最短の歌体で、『古事記』に見られる。
- ② 旋頭歌Ⅱ五七七五七七の歌。片歌を二度繰り返したもので、多くは問答形式になっている。
- ③ 長歌Ⅱ五七七五七七……五七七の長い歌。『万葉集』第二期に完成し、代表作者は柿本人麻呂。
- ④ 短歌Ⅱ五七七五七七の歌。最も標準的な歌体で、現在まで絶えることなく作り続けられている。
- ⑤ 仏足石歌Ⅱ五七七五七七の歌。奈良の薬師寺の仏足石に刻まれた歌がこの形式であることからの命名。